

「世界一」への挑戦

(株) X i b o r g

代表取締役社長・義足エンジニア

遠藤 謙



沼津市長

大沼明穂

近年、沼津市では、リオデジャネイロパラリンピックで日本代表として銅メダルを獲得した市内在住の若山英史選手の活躍をきっかけとして、障害のある人たちが様々な分野で活躍していることに関心が集まっています。本市が目指す「世界一元気な沼津」をつくるには、障害のある人を含めたすべての市民が主体となり活躍することが不可欠です。

今回の市長新春対談は、競技用義足の分野で世界一を目指している本市出身の義足エンジニアで、(株)Xiborg代表取締役社長の遠藤謙さんと、「世界一元気な沼津」を目指す大沼市長が「世界一への挑戦」について語り合いました。

愛鷹広域公園多目的競技場(足高)

【市長】 明けましておめでとございます。本日は、お忙しいところありがとうございます。私は市長就任当初から「世界一元気な沼津」をスローガンに掲げ、市政に取り組んでいます。遠藤さんのように沼津出身で世界で活躍している人を市民の皆さんに知って頂くことも「世界一元気な沼津」に繋がると思っています。ぜひ、いろいろなお話をお聞かせ下さい。

【遠藤】 よろしくお願いたします。

【市長】 遠藤さんは第二校区出身と伺っていますが、どんな少年時代を過ごされたのですか。

【遠藤】 ミニ四駆を速く走らせることに夢中でしたね。地元の模型店の大会で優勝したこともあります。もしかすると、今の「ものづくり」の原点はその模型店にあるかもしれません(笑)。

障害のない世の中

【市長】 遠藤さんのものづくりの原点が沼津にあるというのは誇らしいです。高校ではバスケットボールに励んでいたと伺いましたが、何をきっかけに義足開発の道に進んだのですか。

【遠藤】 大学でロボット工学を学びながら、ロボット技術が将来、福祉やリハビリの分野で人間の歩行の役に立たないかと研究していました。ある時、高校のバスケット

の後輩が、病気で将来自分の足で歩けなくなるかもしれないと塞ぎ込んでいたんです。後輩のために何かできないかとの想いから、これまで研究してきたことをできる限り早く実用的にしたいと考え、MIT(マサチューセッツ工科大学)へ留学しました。

【市長】 なぜMITを選んだのですか。

【遠藤】 義足の研究者である先生がいたんです。彼はロッキングライミングで活躍していましたが、事故で両足を失いました。それでも自分で工夫して義足を作り、無理と言われたロッキングライミングに復帰したところが、記録が伸びたとの話を聞き、驚きと同時に「この先生に学びたい」と思ったんです。

【市長】 すごい!! 障害をものともせず無理と言われたことまで可能にした。その先生は、障害に対する考え方も私たちとは違うのではないですか。

【遠藤】 そうなんです。「世の中には身体障害というものはない。ただ、技術のほかに障害がある」という言葉は衝撃でした。体が動かなくなっても、動かせる技術があれば普通に生活ができる。でも今は技術が未熟だから、障害というものがまだ世の中に存在するんだと。なにより自身で体現しているからこそ説得力があるんです。

